

---

# A L I C E in the DARK

鮎塩

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ALICE in the DARK

### 【NZコード】

N1274D

### 【作者名】

鮎塩

### 【あらすじ】

死者の森で目覚めた僕に、アリスは微笑んで言った。「この森では誰も信用してはいけません」と。遅刻魔の黒兔、無邪気なチエシヤ犬、おかま帽子屋、常識人の五月兔 人喰いの闇歩するダークファンタジー。

protoype : 簿じこキルく（前書き）

ちょっとだけ文章校正しました。

話の筋的には変更はありませんので、確かめなくとも大丈夫です。

走る。

走る。

走る。

もどかしいほどにゅうくりゅうくり、崩れたレンガ壁が、割れたガス燈が、路上に放置された死体が背後へと流れてゆく。

餓死した遺体も、ゴミ箱を漁るやせこけた犬も、路上に溢れかえる

職にあぶれた人も、みんな見慣れた私の街。

なのに月だけがいつもと違う。紅い瞳みたいな真ん丸い月が私をどこまでも追つてくる。

やせ細つた私の手足が、鎧びた機械のように悲鳴を上げる。それで  
もひたすらにもがくように動かす。

走れ、走れ、速く、はやく！

どれだけ走つても走つても、ちつとも前に進みやしない。

景色は確かに変わっていくけれど、似たような路地ばかりで。小道  
も大道路も色あせて、どこもかしこも廃墟のようだ。

ガク、と左足に違和感。

ああ、割れたガラスを踏んでしまったみたいだ。気をつけなければ。荒れ果てたこの街にはいろんなものが落ちている。

グツ。よろめく身体に力をいれて、私はまた駆け出す。

血のあふれる痛みすらも、遠くて。

ボロボロの素足はもう元の色なんて分からぬぐらい真っ黒だ。もう転びさえしなければいい。

まだ走れる。だから、いいんだ。

走る。

走る。

.....。

本当に私は走っているんだろうか。

タールのよつに重たい空気が纏わりついて、夢の中を泳いでいるようだ。

まあ、間違いなく夢なんだろうな、と鈍い頭が答えを返す。これは悪夢だ。

どれだけ走っても血色の月の大きさが変わらないのだから。

走る。

走る。

逃げる。

逃げる。

逃げなければ。

アイツがオッテクル。

バツグいいっぱいの札束でも、パン一個すら買えない国。家をなくした人々が路地に座り込んで日々を過ごす。

幼い私に、かっぽ国の現状なんてよく分かつていなかつた。

死が日常に闊歩する。それが当たり前なのだと思つていた。

崖っぷちに片手でしがみついている人生だつたけれど、それでも生きてこれたのだ。

逃げなれば、殺される。

何度も恐怖に負けて振り返る。姿が見えなくとも安心はできない。頭から流れつたう血が視界ににじむ。赤い月が赤い闇に溶けて歪む。

殺されて……クわれる。

人は獸なのだ。

2本の足で大地を踏みしめ、牙をなくし、火をおこし、言葉を操つても。

本能を無くしたように見えて、たしかに人は獸だつたのだ。

いまの私は生きるために駆け続ける草食動物。アイツは……食欲に支配される肉食動物。

道端でぐつたりした子供が、私の狂つた視界を掠める。疲れきつた老人のような瞳をしていた。

きっと私も、おんなんじ眼をしているのだらつ。

「…………あつた！」

私は無我夢中ながらもちゃんと辿りつけていたらしい。むかし偶然見つけた、だれの縄張りでもない下水道へと通じる道。寂れた廃工場の裏手にそのマンホールはあつた。

夜露もしのげるうえに、野犬や……人間に襲われる心配もない。絶好の隠れ場所で、幸い凍死するような季節でもない。

息も絶え絶えの私にとつて、蓋を開けるのは大変だった。工場からとつてきた鉄の棒でどうにかこうにか挟じ開けた。

枯れ枝のような指はジンとしびれ、手のひらは血だらけ。爪はすべて割れてしまった。

皮がむけて血が覗く手。いつか絵本で見た柘榴ゼラニウムのようでおこしそうだと思った。

暗いマンホールの穴をのぞく。月明かりだけで降りれるのだろうか。私は梯子に一步、足をかける。ただそれだけのことなのに、自分から化け物の口に飛び込んだような心地がした。でもいまさら引き返せるものか。帰る場所なんでもつ……ないのだから。

これが最後、と夜空を仰ぐ。不気味な月光は夕日と同じ赤色なのに、どうしてこうも違うのだろう。

今までずっと私を追つてきたこの月ともやつともよなりできる。

そして私は、地上に別れを告げようとして、

バカリ。

絶望的な音を聞いた。

長い年月を経て腐食していたんだろう。足をかけていた部分があっさりと折れた。

無意識にのばした手が無事な部分を掴む。そしてそこも折れる。違う、折れたんじゃない。

折れたのは私の ゆびのほうだ。体重を支えきれずほんとうに枯れ枝のようにおれてしまった。笑えてくる。

そんなにもこの身体は限界だったのか。

落ちていく

落ちていく

おちていく

?

闇の中へ。

もつ赤い月すら見えない。

「の穴に底はあるのかな。なかつたら生きていられるかな?  
もつやんなのどつだつていいか……。

すべてがぼやけて見えるのは、入りこんだ血のせいか。それとも  
。

「…………。こやな夢…………」

私は窓からあの田のよつて夜空を仰ぐ。赤い月なんてかわいいもの  
だ。

常闇のこの世界には青のこびつな月が浮かぶ。不可能の象徴たる青  
い薔薇のよつて、それは見る者の心をざわつかせる。  
昂揚であり恐怖であり…………安堵。

ここが私のいるべき場所。もしかするとあの街より異常な世界。  
それでもあの悪夢から田覚めるたびに、夢でよかつたと想つのだ。

「…………?」

「「のみんなそこ、お父さま。起つてしまつた?」

「…………、…………?」

「なんでもないの、大丈夫」

私の隣で寝ていた養父 ヴェノムの気遣わしげな瞳に微笑む。  
彼はめったに言葉を話さないけど、その気持ちが嬉しくほどほほわつ  
てくれる。

「…………」「…………」

「うん、おやすみなさい」

くすり、と微笑む。彼は悪夢を良く見る私のために、わざわざ一緒に寝てくれる。

心配性な父の艶やかな黒髪をやさしく梳すく。せりつと手をすべる感  
触に落ち着きをとり戻していく。

「夢で、よかつた

今が幸せだから戻りたいなんて思つわけがない。

「ありがと、…………お父さま」

異常が正常、常識が異質、異形が基盤、一步外に出れば人食いが口  
をあけて待つている。

そんな世界で居場所をくれたお父さま。

愛しています。たとえ 私は、ペチトニスザウルスであっても。

prologue  
了

protoype : 痴じこキルく（後書き）

スローペースですが、ちゃんと続けて行きたいと思います。  
次から本格的にエグくなる予定。  
はやく帽子屋とか出したいです。うずくづ。

語彙が無くて拙い小説ではあります、おやきにいただければ幸  
いです。

## ウサギのかいり騒ぎ 1（前書き）

ちょっとだけ文章校正しました。

話の筋的には変更はありませんので、確かめなくとも大丈夫です。

ほんのそれこそなすれ違ひのはずだつた。

素直に頭を下げれば、彼女は笑つて許してくれると……なんて、傲慢な思い込みでしかなかつたんだ。

並べられた嘘のドミノが、終わりに向けて倒れていぐ。徐々に、徐々に、速度を上げながら。君と築いてきた幸せな思い出すり、巻き込んで止まらない。

枯れた声

むせび泣く君。

信じられない、もつ信じたくない。

つづくまゆに手を掛けむ。

振り返つたのは僕だったのか君だったのか。

そして、最後のドミノが倒れる。

木の根元に、漆黒のクレマチスが一輪だけ咲いている。

木は奇怪にねじれ、老人が苦しそうに悶えている印象を与える。おまけに葉は虫くいだらけで、色は紫。しかし別段めずらしい訳ではなく、この森では一般的なものである。

陰気さがこの上なく、常夜の森にふさわしい。

しかしこの花は違う。森に棲むモノたちにとつて、クレマチスは特別なものだ。

もちろん私にとつても。

花はたつた一瞬で出現した。出芽もなにもかもの過程をすつ飛ばして、気がつけば蕾がほころぶところだったのだ。

私は花弁を両手で掻き分けのぞきこむ。そう、この花はとつても大きい。

なにせ、人が入っているのだから。

「こんばんは」

「…………？」

あこがれをすると、キヨトンとした田をされた。そこには青年が胎児のように身体を丸めて眠っていた。

「あ……？ ぼく、は

「お田覚めですか？」

「めざ……？ 寝てたのか？」

その青年はゆづくりあたりを見回す。私を見て、寝転んでいた花を見て、空を見上げて、また私を見る。そして、こういうのは初めてだから、どつ切り出したものか。こんな私の柄じゃないってのに。

私が少しだけ躊躇つていると、再び空を仰いだ青年が愕然とする。

「あ、青い月！？」

「あれが本当に月がどうかは、調べようが無いんですけどね」

シュークリームのようになりません、不自然なまでに青いそれ。まあそれ以外に呼びようがないので、私も月と思つよつにしているが。

「こ、ここは一体…………。僕はたしか、」

「死んだはずなのに？」

「！」

自らの口を押さえる青年。声に出して言つてしまつたのかと思つたのだろう。小さな呟きは、耳のいい私にははつきり聞こえていた。けれど聞くまでもない。「うして花で眠つていたといつことは、それが答えなのだから。

「…………君は…………」

「私はアリス。アリスです。苗字はありません。お好きなようにお

呼びください」

その青年の手をとつ、花からそれとなく引きずり出す。彼は困惑と疑問符が頭に「きゅうきゅう」と詰まっているんだな。彼は私のなすがまだ。

「あ、花が……」

夜に染まつたよつたクレマチスは、早くも枯れ始めている。

「おつこの寝台は役立つてしましましたので

私は花にそつと触れる。青年は自分を包んでいた花をぼうつと見つめる。

少し痛んだ栗色の髪に、銀縁の眼鏡。20台半ばだらうか。どこか憂いた表情をする人だと思つた。

「ええとアリス、でいいか? ここはなんなんだ?」

「ご安心下さい。ちゃんとじる説明いたしますので」

「あ、ああ」

「その前に、耳を澄ませてください。声が聞こえませんか?」

「カラスの声しか聞こえないけど」

「……カラスの声なら私にも聞こえています。そういうものではなく、物理的に耳で捉える声ではありません」

「ち、違うのか?」

「空耳に近い感覚で貴方を、いえ貴方だけを呼ぶ声が聽こえるはずです」

「ええと、ちよつと待つてくれ」

何が何だか分からぬままの青年は、それでも真摯に耳を澄ませる。

「？」

そこでやつと何かに気づいたか、彼はあらぬ方向を見つめる。遙か彼方にそびえる、城といつにほ巨大すぎる古式建築物、そこよりも少し南に行つたほうか。

脳に直接響く声という話だが、それはどんな感覚なのだろうか。

青年はその不可思議な現象に眉根を寄せている。

「……あちらから聞こえるんですね？」

「あ、ああ……。微かだけど、誰かが遠くから呼んでるみたいだ」  
その声が聞こえるのは当事者と“ある立場”的なものだけで私には何も聞こえない。

右も左も分からぬ青年に頼るしかないとは何とも心もとないが、私にも止むを得ない事情があるのだ。

それもこれも、あの遅刻魔のせいだ。

「では移動しながら話しましょうか。一刻も早くここから離れないと。ずいぶん時間がたつてしましましたから」

「ここにいると何かまずいのか？」

「ええ、それはもう」

私はエプロンスカートに隠された太ももに手を這わす。ギョツとする青年を視界の端にとらえたまま、一本の銀製コンバットナイフを引き抜いた。

「まさに今、やつかいなのが来ましたから」  
「な、何言つて……」

青年の疑問をかき消して、木々の合間から一つの質量を持つた影が花の真上に降り立つた。

私は逆手に持つた特殊銀のナイフを隙なく構える。敵は2匹。両方とも私の腰ぐらいまでの大きさで、大腸を連想させるグニヤリとした芋虫（のようなもの）にカマドウマの足が生えている。その異形たちは威嚇するように身震いした。この生理的嫌悪に比べれば、台所に出没するGのつべ天敵がいつそ可愛く思える。

出来れば斬りたくない。いやーな汁が出るからだ。

醜悪な異形の片方は全身が血まみれ、もう一方は口周りを同じく朱に染めて、何かを食べているのか口がそもそもぞと動いている。

「う……」

「落ち着いて、大丈夫ですよ。それより下手に動かないで下さいねつて闇雲に逃げ出したりする気配はない。」

「…………アリス？」  
「そこの虫けらども。邪魔だからどうしてくれる？」

クアクア！

クアクア！

カラスに似ただみ声、その2重奏が私の挑発を嗤うように森の闇を搔きまわす。それはその悪夢のような怪物2匹から発せられていた。

「…………さつき耳を澄ましたときに聞こえていたのは、こいつらの

声だったんですよ。ここにはカラスなんていませんから」

突然の異常事態に青年は声もない。

『…………、………… イ』

クアクア。

クアグア。

やがて鳴き声にノイズのように不快な音が混ざり始める。

『………… あまい におい…………』

それは拙いながらも芋虫の発した意味ある言葉だった。  
知能があるのか、と青年のおどろく気配がする。

『二ンゲン』

『二ンゲン だ』

背後で私の服のはしを青年が掴んだ。その手からかすかに、押さえ  
ようのない震えが伝わってくる。  
血まみれの不気味な異形。

あれらの怪物が望むモノは誰の田にも明らかで、どうやっても友好  
的には見えないだろう。

見えたのなら気が狂っているか、よほど虫好きで田つ気が狂つて  
いるか。

『あります』

『ありす』

『ジャマする タ』

『れディ ピッグ、ジャマスルナ！』

ガア！

芋虫はひときわ高く吼えると同時に、その身体をしなやかにたわめて、

「あ、アリス……！」  
「（安心を）

私は青年を後ろ手に押し倒しながら、右手のナイフをすばやく投げ打つ。

標的は、今まさに飛び掛つてこようとした芋虫 ではなく先ほどの黒いクレマチス。

狙いたがわざナイフはほとんど枯れかけた花に突き立つ。花弁の裏に取り付けておいたモノをも貫いて。

私たちが伏せるのとほぼ同時に、爆炎が陽の昇らない森を真昼のように照らし出した。

押し倒したために青年の顔がすぐ近くにある。当たり前だが啞然とした顔だ。

何が起こったのか分からないと、彼の目が問いかけている。

「指向性の爆発トラップです。あの花びらに仕掛けていたんですよ。

「

「トラップー？」

「まあ、こんなことあるううかと」

身を起こして煙の晴れた視界を確認する。あいつらの姿はない。石炭みたいなものが残っているが、それが花かそれとも芋虫だったモノなんかは分からぬ。

落ちていた銀のナイフを回収して点検する。

うん、やはりこれは逸品だ。傷一つなく愛刀は無事だつた。

「いつのまにそんなものを。……あ、花に触れたときにか」

「嫌な気配が近づいていましたから」

私は一つ頷いて、一枚のトランプを取り出してみせる。

「これがそれです。一定の負荷をくわえると爆裂するトランプなんですよ。さっきのは上方へと指向性を持たせてあるものですね」

「…………はは、…………物騒なメルヘン道具だな…………」

至近距離にいながら私たちが無事なのもそういうことだ。  
このコンバットナイフといい、さすがあの伯爵製である。あいつの性格はともかく腕はすばらしげ。

「うまく花の上に降り立ってくれて良かつたですよ。へたに斬つてたら一人とも黄色の液体まみれになつてるとこでした」

「や、そつか」

そんな理由かと驚くべきが呆けるべきか、青年は表情の選択を迷つたあと、そのどれとも違つ選択をした。

「あ…………。そうだ、助けてくれてありがとうアリス

「…………いえ」

私は無意識に頬の傷跡をなでた。かすかに痛むと同時に苦い敗北がよみがえる。

「…そういえば、怪我してるな。それ大丈夫なのか?」

「まだ完治していないだけで、今回の怪我ではありませんよ。」

「でも」

「で、声が聞こえるのはあつちでしたね? 今も変わりませんか?」

「あ、ああ……」

青年の背を押して歩き出す。まだ彼の戸惑いは濃くても、進まなくては話が始まらない。

面倒くさい。

「じゃあ、ここを離れたらちゃんと治療しないか?」

この人は案外お人よしなのだらうか。

しかし説明が悪かったか、どうも勘違いをしてこるよつなのでゴルリと首を振る。

「いえ……違いますよ」

今いるここが特別に危ないのではない。そんな意味じゃない。

この森に安全な場所なんて中央にそびえる女王の古城ぐらいだ。

違う?と振り返る彼に、私は淡く笑う。

「あなたが あれらを惹き寄せるんですよ。甘い甘い香りを放っているから」

青年がゆつくりと田を見開く。

彼が蹲つていたあの花には、その芳醇な香りがたっぷり滲みこんでいた。

私がわざわざ花に……それも使える状況がかなり限定されるトラップを仕掛け、しかもそれが無駄にならなかつたのは、ひとえにその香りに奴らが群がると知つていたから。

「さあさあ、もっとベースを上げて歩いてください。一箇所に留まつていても出口はやつてきませんよ」

「甘い香り…………？」

「あなたを喰らひたために、どんどん集まつてきます。逃げ切りましょ」

青年は自身の腕に鼻を寄せ、そんな匂いはしないけど頻りに首を傾げる。

青ざめた月はいつもと変わらずに不気味な沈黙を守る。ただそこにあるだけで、ここが異質な世界なのだと突きつける。

「ここは死者の森。人々が生まれかわるべく、死した魂が辿りつく最後の場所」

「…………」

死した。

青年は確かめるように、その弦を落とす。

「…………ああ、そうか…………」

彼は骨ばつた手のひらを無造作に眺め、次いで痛みを堪えるように

肺があるあたりを押さええる。

「……………やっぱり僕は」

死んでたんだな、と。

青年は苦しそうに、やりきれない感情を抱えて、私と目を合わせる。

「この森では誰も信用してはいけません。ここにいるのは死者と案内人、そして」

「…………」

青年は視線を芋虫の残骸に移す。あの異形は何だったのかと、いつ答える。

「……………人喰いです」

## ウサギのかじり歯 1 (後書き)

ちょっと短めですが、プロローグだけとこりのものあれなんで。やつと本題に入れます……。結局あまり血みどりにならなかつたのが反省どころです。

ではでは、もうじければ次回もお付き合いくだせいませ。

## ウサギのかいしゃ 2（前書き）

前回、青年の一人称を間違えておりましたので、全て修正いたしました。

申し訳ありません。

「うわーーん！ 遅刻！ 遅刻だよおー！」

黒髪の少年が、叫びながら森を駆けていく。がむしゃらに進んでいる……よう見えて、障害物や人喰いの縄張りを器用に避けて通つていく。

少年は怯えきった顔色で銀の懐中時計を開き、"距離"を確認した。

「……あ、あと少し、あと少し」

鋸びた鉄色の荊を搔きわけ、ひたすら田指す地へ進む。棘が少年の頬を、手のひらを、膝こわいを容赦なく傷つけていく。少年は眉を歪めながらも止まらない。

いや、彼いや少女だろうか？ ことって、痛みは歓迎するものであつて、むしろ傷つくなびウツトロしたくなるのをグッと我慢しているのだ。

「あつーまずいなあ、まずいよう。寝坊したーなんて言つたら今度こそ喉首かっ斬られちやう…………。痛いのは好きだけど死ぬのは

ヤダ よう…………

悲壯な溜息を肺から搾り出して、目前に立ちふさがった崖を仰ぐ。

ぴょん。

手近な枝にひと息で飛び乗りさらりと跳躍。短い手足でバランスをとりつつ、柔軟かつ慣れたフォームで固い大地に降り立つ。森を駆けることに関してだけは、少年の右に出るものはない。

この茂みを抜ければ目的地のはずだ。

「『ハ じめんよアリスト……』

「…………い、 いない…………」

スライディング下座の勢いで飛び込んでみれば、そこにあつたのは何だかよくわからない消炭けしそみと一部分が焼け焦げた木だけで、まったく人影は見えない。

「ビビビビビビしよう、ビビしよう…………。ハ、ハハハ間違えないんだよね？」

時計を再び確認して、少年はがつぶつと肩を落とした。……はやく追いつかなければ。

追いかけるのはあまり得意ではないけれど、『壱』が聞こえたのへ向かえば合流できるだろ、きっと。

「逃げるのは得意なんだけどなあ…………

少年は落ち着いたつと、強ばる指でなだめる様に耳をなでる。それはロップイヤー種の兎耳にそつくりで、肌触りのよさそうな黒絹の毛が、警戒心に毛羽立つてゐる。

ああ、あいつに見つかつたらどうじよ。

「アリスう……」

座り込んで泣き出したい衝動をこらえて、少年はせわしなく走り出した。見えない不安という化け物から必死に目をそらすように。

+

芋虫の成れの果てを眺めて立ち尽くす彼の手をとつて歩く。

血の気が引いて冷たく、それこそ死体の手をとつたような感触だつた。死者とはいえ魂という物質そのものには温度があるはずなのに。

「人間とは果実のようなものです。皮を剥けば実【ひくたい】が芳醇な香りを放つ。それが人喰いを狂わせるんだそうです」

「…………」

「あなたは常に狙われる。その自覚をお持ち下さい」

青年が「ぐり」と喉を鳴らした。

「さつきの…………」

襲われた恐怖が甦つてゐるのか、彼の視線がうつろに彷徨つ。

「さつきの芋虫みたいのが…………たくさんいるつてことなのか?」「…………いえ。確かにさつきのよつたな低級の人喰いはうじやうじやいますが」

「う、うじやうじや…………?」

「うじやうじやと無数に。数えるのもバカらしい有象無象どもです」

青年の声が引きつっている。

「でも本当に厄介なのは、人の姿をとるものですね」「…………化されるのか」

上級の人喰いほど知能は人間と大差がなくなる。

「そしてこちらの油斷を誘う。知恵で惑わすものほどたちが悪いものはありません」

「…………知恵で獲物をおびき寄せる、か。まるで食虫植物みたいだな」「もしお菓子をあげるとか言われても、ついて行つてはダメですよ?」

性質の悪い例えに微妙な顔をする青年。それは私の笑えない冗談のためか、道の先への不安のためか。

「食われる、か」

青年は何を思い出したのか頭痛をこらえるようにこめかみを押さえ  
る。声には出さずに彼は何事か呟く。

でもいつそ食われたほうがいいのかもな……、そう言つてゐるよう  
に聞こえた。

青年はやりきれない表情で、ずれてきた眼鏡を押し戻す。  
彼の死んだ理由も人生も、私は知らないし、興味もない。ただ何か  
を後悔をしてゐる』とは伝わってくる。

「なにか現世に心残りでも？」

言いながらも私は道なき道を切り開いていく。黒ずんだ薦をナイフ  
で払いのけ、人間を捕らえられる大きさの蜘蛛の巣を迂回する。  
青年はうつむき、私と繋いだままの手を強く握り返す。まだその手  
はひんやりと冷たい。

「ない奴なんているのか……？」

「ふふ、確かに」

笑顔で死ねる人間など全体のどれほどだろうか。

私は会話しながら何気なく茂みにナイフを投げ打つ。鳥を絞め殺し  
たような鳴き声とともに、忍び寄ろうとしていた『何か』の気配が  
途切れれる。

青年がぎょっと身構える。

「……どのみち現世には戻れないのです。未練を断ち切れとは言い  
ませんが、自ら人喰いに向かっていくような事はどうかなさらない  
で下さい」

時々いるのだ。来世なんて要らない、もう一度生まれて人間をやる  
なんて御免だという魂が<sup>ひと</sup>。

「…………」

青年は、はいともいいえとも言わない。しうつがない、話を変えようか。

「声がする方向は変わりませんか？」

「え…………ああ。今は確かにむう少し右から聞こえる。少しづつ近くなつてはいるみたいだけだ」

「じつちですね」

すると少し開けた場所に出た。薔薇に似た形状の岩石がゴロゴロとしている。その岩はツルリとした陶器のような手触りで、乳白色の表面が月光を受けて青白い光を躍らせていく。

幻想的ともいえる光景だが、この景観にいちいち感動するような感性の持ち主など、じの森にはいないだろう。私を含めて、だ。

不幸な薔薇園である。

「じのじは少々歩きづらいかもされませんね」

「アリス、それで…………その」

「はい…………ああ、すみません」

そういえば手を繋いだままだった。

……まあいい、じのほうが歩みも早いだらう。どつもじの青年は考えに沈むと動作を止めてしまう[癖]があるようだから。

「はぐれないよ!」。いけませんか?」

「…………あー、…………まあいいか」

青年は諦めたのか、溜息を一つ。

彼は岩場のむらむらに向ひつを見据える。視線をはるか彼方、『声』のする方へ。

「なあ、アリス。この声はなんなんだ？」

「出口ですよ」

「……あの、ごめん意味が、」

分からぬ。

と皆さうとする声を遮りて言い直す。

「出口が貴方を呼んでいるんですよ」

「うひあ、うひちだよ。うううううるよ、ヒ。

青年の反応は、眉を少し顰めただけだった。だいたい理解不能な答えが返ってくるだろうと身構えていたのだろう。

「…………声の主は移動してるよつだけど…………」

「そうですね、そりや動きますとも。出口ですから当然です」

「う、動くつて…………、まさか探ししているのは出口つて名前の生き物なの、か？」

青年が困惑の瞳で見つめてきた。訳がわからないと。でも出口を見つければ自然と解ける疑問にわざわざ答えるのも面倒だ。

こちとしては青年を守りきればいいだけのことで、その間どんな心理状態にならうが知ったことではない。一応、結構ひどい本音である自覚はある。

第一喋りすぎるとボロが出そうだ。

「その声が聞こえるのは当事者たる死者と、担当の案内人だけなんです」

「さつきも言つてたな。死者と人喰いと、案内人つて」

「案内人は死者を人喰いから守り、転生への出口に導きます」

私は青年を引つぱつて、岩場の影を縫つように移動する。少しでも見つからないようにするためだが、どうも先ほどから森の様子がおかしい。

「……それより氣をつけてください」

「な、なんだ？」

「不気味に静かとは思いませんか？」

特に岩場に入つてからは

襲われもしない。人喰いの気配がちらともしないのだ。

人喰い           特に低級の人喰いは獸そのものだ。巨大な力を持つものへ取る態度は3つ。

つまり共生か従属か、もしくは忌避か。

しかしたいていの場合は最後の選択肢が正解となる。

「ここに上級の人喰いがいる可能性があります」

「……それってまさか人型、の？」

「ええ……」

周囲を警戒していた私は気づかない。そのとき青年が何かに気づいて、思わず口元を覆うところを。

ここは誰の縄張りでもなかつた筈なんだが……もしや『手当たりしだい』でも出たのだろうか。

「あ…………アリスト！」

「どうしまし……」

た、と言いかけて青年の戦慄く指先がさすものを見た。  
ああ、無理はない。これは 正視に耐えないだらう。ただし  
この森では、そこいらの木々ほどありふれた光景。

「なん……だ、これ……」  
「これで納得いきました……」

人と変わらぬ背丈の岩を一面の血が抱き込んで、純白の花弁を冒瀧  
していた。異質な青の月光がそれを照らし出し、濶よどんだ紫に染めあ  
げている。

凄惨でありながら妖艶、そんな美しさを血薔薇は誇っていた。

「おそらく強力な人喰いが食事したあとなのでしょう。… かち合わ  
なくてよかつた」

「

ワイン色の薔薇を墓石に、原形をとどめないナニカが散乱している。  
子供が無邪気に粘土をこねて遊ぶかのように、無茶苦茶な圧力でこ  
ね回された肉体があちこちで潰れ、畳まれ、破裂し、捩ねじり切られ  
ている。

それはもう元人間としか呼びようのない、無残なオモチャの成れの  
果てだつた。

……上級の人喰いほど知能は人間と大差ない。ゆえに食べるため  
だけに狩るとは限らない。

これだから、人型を取れるほど力を持つものは、性質た質が悪いのだ。

「逆に言えば今ならここは安全です。ほかの人喰いたちが戻つてく  
る前にここを離れましょつ」

「…………、…………？」

青年の手を引こうとして失敗する。彼は口元を覆つたままその場から動こうとしない。しうがない、いつそ氣絶させて運ぼうか……つて、だめだ。出口がどこだか分からぬのだった。

「これを…………これを見て…………言ひとはそれだけ、なの  
か？」

青年の顔色は闇で化粧されていてもはっきりと分かるほど青白い。確かにショックキングな光景だろうが、そこまでのものだろうか？ 食事中を見てしまつよりはよつぱりまじだと思つたが。

「残念ながら、この森ではあつぶれたことです

今さら心を動かすようなものでもない。これぐらいでガタガタ言つていてはこの森では生き抜けはしない。

「…………アリス…………」

こみ上げる吐き気と闘つてゐる青年。彼は心ここにあらずと、しばらく視線を虚空に彷徨わせる。

やがて青年の瞳が焦点を結んで、しっかりと私と目を合わせた。

「…………アリスは…………？」

青年の愕然とした顔は、色素を失つたよつて白かった。

「…………アリスはなになんだ  
？」

ああ、やつと気づいたのか。

勿体つけた意味深な言葉で混乱させ、会話の主導権を握つていればいけると思ったのだが。

しょうがないのだ。

あの馬鹿がまさかこんな時にまで遅刻するとは思わず、それっぽく演じては見たものの、ほとんどぶつつけ本番だったのだ。

まあ、不測の事態に弱い私にも落ち度があるといえはある、かもしない。といふか予想してしかるべきだつたんだ、あの遅刻魔の駄  
目つぶり加減を……うかつ迂闊。

青年はそろりそろりと握つっていた手を開き、繋いでいた私たちの手がゆつくつと離れていく。

「死者じやない、最初に襲われたとき人喰いは君を狙つてはいなかつた。案内人じやない、君は声が聞こえていない。僕を助けてくれたのは、それは、それは、案内人としてじやないのか？」

確かにわたしは案内人と名乗つた覚えはない。

「……疑いますか？」

私が人喰いじやないのかと。　　自分を騙しているんじゃないのかと。

「（）では誰も信用するなと言つたのはきみだ」

「……それを撤回するつもりはありませんが、困りましたね……」

…

正直に話すべきか？しかし余計な疑念を招くだけに終わらないだろうか。

彼に対してはやましことなど何ひとつないのだがまあ、案内人でないのも本当のことだ。

しかし私が口を開く前に、前触れなく背後に気配が沸いた。

「そうそうー 人はみんな生まれついての詐欺師なーのさー！」

「つー」

「！？」

「騙し騙され生きていぐ。それが持ちつ持たれつってやつだなー！」

私は咄嗟に右ふともものコンバットナイフを抜き放つ。背後の背後から抱きついてきた男の喉笛に、それをピタリと押し付ける。

「んねー アリス？」

「つデインガー！ 離しなさい今すぐ……つー」

「えー。やーらかいし、もつちよつと」

「警告はしたわよ」

躊躇わざ刃で搔きかかる。しかしそれは何もない空間を滑つただけだつた。予想はしていたが舌打ちしたくなる。ようこよつて、こんな時にこんな奴が……

まるで計つていたように絶妙なタイミング。

「だめだめ、アリス。ぼくを殺したければ、おれの気配ぐらい掴

めるようにならないとつー」

ケタケタと笑う一人称の安定しない男。いつの間にか青年の真正面に、そいつはあぐらをかけて浮かんでいる。

その不審人物には、ビーグルの耳と尻尾があった。白と黒、2色の包帯を身体にぐるぐると巻きつけているので、まるで囚人服を着ているように見える。

そいつは固まっている青年を興味深そうに眺めて意味ありげに笑う。

「な、なんだ……？」

「……いいやー？」

私は青年と駄犬の間に身体を割り込ませる。おかしなことを吹き込まれてはたまらない。私は目的をはやく終わらせたいのだ。

「何のようかしら、チエシャ犬さん」

ディンガー チエシャ犬の目が二イと細められる。その目に虹彩はなく、白目の中間にこの森そのものの濁んだ闇がトグロを巻いているだけ。

「人間ねえ……どうしたのアリス。 その子、携帯食？」

背後で、青年が息を呑んだ。



## ウサギのかいり騒ぎ 2（後書き）

やつとチョシャ犬を出せました。彼の一人称が一文で違うのはわざ  
とです。

次こそ帽子屋登場…………させたいです。

## ウサギのかいり騒ぎ 3（前書き）

ちょっとだけ文章校正しました。

話の筋的には変更はありませんので、確かめなくとも大丈夫です。

「…………ティンガー…………いい加減なこと言わないで」

一步、庇つた背後で青年がゆつくりと後ずさる。

「アリスは…………」

「落ち着いてください」

なだめるように、私は努めて平静な声で話す。いつも時は慌てた方が怪しまれる……もう無駄な氣もするけども。

「あなたを食べるつもりなら、との旨に襲い掛かっていますよ。いくらでも油断なさっていたでしょう、私に対しては」

「…………」

腹の立つことに、チョシャ犬がニヤニヤ笑つて見ている。奴は事態を引っ搔き回すことを生きがいとしている公害生物だ。私は犬に警戒しながらも、ちらりと背後に視線を送る。

「私はあなたに誰も信用するなと言いましたね？ あんな不審人物の言葉を信じてはいけません」

「…………じゃあ、」

青年は息苦しそうに喉に手をあてている。必死に状況を整理しようとしているのか。

「…………じゃあ、アリスは結局何なんだ……？」

「…………そうですね。どう、見えます？」

純粹に興味があつたのだ。この森において私は第3者の目にどう映るのかと。

青年は戸惑い躊躇ためらひつて、瞳の不審を消さぬままに答える。

「わからない…………。ただ、死者じゃないことはわかるけど」

まあ、死者がこんなに事情をつらつら知つていてる訳がない。

「君は人があんな死に方をしているのに平然としていた。でも人喰いから守ってくれた。それに…………そうだ、この世界にはカラスがない。なのに君はカラスが何か知つていた。ここにいるのは人か案内人か死者だけなんだろう？なのに何故？」

だから…………と、青年は目線のやり場に迷つて俯いた。

「人喰いにも案内人にも…………人間にも君は見える」

「アッハハハハハ！」

「！」

チェシャ犬から田を離したつもりは無かつた。なのに笑い声の主はどこにも見当たらない。

消えたチェシャ犬。今度こそ本当に舌打ちひとつ。

私は青年を      引き寄せて守るひとつとしたが遅かった。

「すごい、すごいよ、大つ正解！ 愉快な死人にんげんだねえキミはつ！」

「ひつ      !？」

「たつたそれだけの情報と時間で、全部見抜いたねつ！ すごいよ！」

チェシャ犬の手が青年の頭を後ろから抱え込む。

「ティンガー！」

その陽気な抱擁はまるで親しい友人との再会。身長差がさほど無いためチェシャ犬は地面から浮いている。

「そのと一りだよ坊や。……今はそのどれもが正解なのさ」

「つ！」

青年の耳元に寄せた口で、そつと優しく囁きかける。奴は生き生きとした目で、いらんことを吹き込む気が満々だ。

「どう、いつ……」

「よくお聞きよ青年」

チェシャ犬は実に楽しそうに。

「あれはアリス。氣狂いアリス。彼女は人間でありながら人喰いと親しむのさ。      ねえ？」

「な……」

そしてそのまま味見をするようになり、青年の耳に齧りついた。『、』  
の駄犬……！」

私はとつさにナイフを投擲する。

「離しなさい……」

「おつとお」

チエシャ犬がグラリとよろめく。うまく側頭部にナイフが突き立つ  
たのだ。

私は取り戻した青年をまた背後に隠す。青年は放心し、少し出血し  
た耳を押えていた。

「うわーグッサリじゃん……。どつかの遅刻魔と違つて、ぼくにこ  
一ゆ一趣味はないんだよアリス？」

「どうせ空っぽの脳みそなんだから問題ないでしょ。勝手に味見な  
んかした罰よ」

「うわー、ひどーーい。ちょっと甘噛みしただけでこの仕打ち！  
ていうか一瞬すぎて味なんてちいつとも分かんなかつたしい！」

「水素より軽い口ね。いいからとつとと閉じてちょうだい。  
……すみません、大丈夫ですか？」

セリフの後半は背後の青年に向けて。

彼はチエシャ犬を凝視している。側頭部に刺さったナイフが衝撃的  
だつたのだろう。

なによりその状態で平然としているチエシャ犬という存在が。

「……これが、人型の人喰い……」

「そういうことです」

青年の瞳が揺れている。私の背後においてもまるで安心はしていないようだった。それはチェシャ犬への恐怖心ゆえか、私への懷疑心ゆえか。

「あ。こうなつたら正直に話そつ。今更フォローできるかは分からなくてもだ。」

「こ」の森にいるのは死者と人喰いと案内人、けれど何事にも例外はありません

「それがアリス……？」

「そーさあ、アリスは生身の人間なのだよ」

チェシャ犬が空中で優雅に寝そべつてい。彼は絆創膏をはがす気軽さでナイフを一気にひき抜いた。頭から首へとだらだら流れ落ちる血は、どぎついショツキングピンク。ベンキを引っかぶつたような場にそぐわぬ陳腐さがむしろ異常さを際立たせる。

「で今回、案内人の代理を頼まれてるんだってさー」

正確にはただの手伝いだったのに、案内人が遅刻したせいで代理をするはめになつたのだが。チェシャ犬が知つていたのは驚きだが、こいつのことだ、盗み聞きでもしていたんだろ？

「アリスはどうやってこ」の森に……？」

私は肩をすくめて、どうということでもないと説明する。

「……ちょっと飢えた兄に食べられかけましてね。逃げる内に六に落ちまして、気がついたらここに」

「…………は？」

「どうして死ななかつたのか、私にも分からんのですが」

嘘偽りない事実だ。こればっかりは説明しろと言われても出来ないものはできない。

青年はあくびをしているチエシャ犬をちらりと窺う。

“人喰いでもある”つていうのは…………？」

もちろん私は人を食べたことはない。

……だけど彼らと私たち人間はきっと同じなのだ。あの故郷での出来事が、私の奥底で絶え間なく主張する。

同じ種族でありながら起こつてしまつた、喰うか喰われるかの捕まれば終わりな鬼ごつこ。

忘れられる訳がない。

自分以外の動くものはすべて食糧、そんな人間と言つ雜食種。共食いをしないだけ、人喰いの方がましではないのかとさえ思う。

「食べるものがなければ、人だつて人を食べます。殺すことなんてもつと珍しくもない。たとえ血が繋がつっていても、です。なら人間も人喰いとそう大差はありませんよ」

「…………でも」

青年は苦々しく薔薇の墓石を振り返る。

「人間に残虐性がないとでも？」

「…………」

極論に過ぎるかもしれない。しかし理解してもいいおつなびとは思つていない。

青年は押し黙る。反論の言葉と、兄に食われかけたと言つ私への当惑、人も人喰いが同いだと言い切られた嫌悪感、それらが物言わぬ彼の瞳にひしめき合つてゐる。いやそれだけじゃない。

青年は苦渋に満ちた顔で額を押さえた。視線が過去を彷徨つてゐる。

もしかしたら。

この青年は、殺されたからここに来たのだろうか。

「ねえねえ、もういいー？ お話し終わつたあ？」

月を背にするチョシャ犬を私は鬱陶しげに仰ぐ。こいつがこんな言い方をするつてことは、

「…………もしかして一緒に来る気なの？」

「だつてこんな面白そなことないじゃん。おれを楽しませてよお、アリスちゃん？」

私はいま心底嫌そうな顔をしてゐるだろ？

「冗談じやない。…………というのが本音だが、どう言つたつて着いてくるに決まつてゐる。

何より、身を切るほど悔しいが私ではこいつに勝てない。

「…………じゃあ、せいぜいナンパの盾になつて貰つわよ

「ー？」

青年が目を見開く。

「はいはい、立派に騎士ナイトの役目を果たして進ぜよ、お姫様と王子様」

チエシャ犬はこれでも上級の人喰いだ。おかげでさつきから低級の人喰いが寄り付いていない。

便利な道具を手に入れたと思って先へ進もう。しかしあつさりと同行を許した私に、青年はより疑惑を膨らませてしまつたようだ。人喰いとともにに行くなど正氣かと。

「大丈夫ですよ、ティンガーはあなたに危害は加えません」

腹が膨れていよいよだから と言いかけて止める。青年も想像はついているのかもしれない。都合よく居合わせたこのチエシャ犬こそが、先ほどの血薔薇の職人なのだと。

では行きましょうと、私が差し出した手を青年は取らなかつた。それも仕方ないかと溜息をついて手を戻す。チエシャ犬がクツと笑うのを睨みつける。誰がややこしくしてくれたと思つてゐるのだ。

「……あつちから声がする。……まだ遠い」

「ええ。行きましょ」

歩き出す私に一歩遅れて青年が続く。チエシャ犬は私たちの頭上にふよふよと漂う。

青年のついた一つのウソに、私は気づかなかつた。

死ぬのは怖かった。

今でも考えるだけで、ほら、こんなにも足が震える。

君にそうさせたのは誰でもない、僕なのに。

殺されてあたりまえな、ひどい男だつたとしても、それでも。  
……………僕は死にたくなかつたのだ。

どうしてだろうと考える。

こんなにも僕は、意地汚い男だつたのかと。

血に嫌悪にかられても、それでも生きたかつた理由はなんだったの  
だう。

ああ、どうしても思い出せない。

血が視界を、部屋を染めて、君の泣き顔が目に焼きつく。  
最後のドミノが倒れる刹那

。

たしかに何かを呑いたのに。



## ウサギのかり騒ぐ 3（後書き）

また短めですが、今回は2連続更新なんで、このあたりで。  
もうちょっと疑心暗鬼へのプロセスを書き込めればよかつた  
後悔先に立たずですね。  
……

次こそ本当に帽子屋の登場です。

## ウサギのかいり騒ぎ 4（前書き）

ちょっとだけ文章校正しました。

話の筋的には変更はありませんので、確かめなくとも大丈夫です。

「ううう、遅刻、遅刻、まだまだ遅刻うーーー」

少年がねじくれた木々の合間を駆け抜け抜けていく。  
淀みない足さばきに、迷いのない道の選択、ただそれだけを見てい  
れば拍手を送りたくなるほど華麗な疾駆で、しかし身も世もない情  
けない表情がその全てを包無しにしていた。

「間に合え、間に合え、間に合つかなあー」

やがて木がだんだんと減り、夜空が広がつていく。開けた場所に出  
たのだ。青い月明かりのもと岩の薔薇が咲き乱れている。  
そして少年の頬に冷や汗が光る。

ここは、ますい。

ひじょーこますい。

迂回をしたいがそんな暇も余裕もない。もしこんな障害物の少ない

場所であいつに襲われたらそれこそ一溜まりも…………。

恐怖にかられた少年は、おそるおそる周囲に視線を這わせ、視界の違和感に気づく。なんだろうと田を向けると、そこには葡萄色の薔薇岩が一輪だけ咲いていた。

「うわあ、えつぐいなあ…………。やつたの誰だろ」

でもこれはこれで、かつこうう綺麗かも。

氣弱そうに見えて、少年だつてこの森の住人だ。自分に關すること以外にはとことん凶太い。

そしてすぐにこんなことをしている場合じやないと首をフルフルと振る。『声』に耳を澄ませて方角を確認、田標を少し西へ修正する。

ここはじめて少年は少しだけ油断してしまった。薔薇に氣をとられて近づく氣配に気づけなかつたのだ。

疾走を再会しようとしたその時。ふと薔薇が陰り、その色を漆黒に染める。

何かが月光を遮っているのだと気づいた時には上空からバサリと羽の音。

「 ツツ！…！」

声にならない悲鳴を上げて少年は逃げ出した。

振り返りもしない。振り返らなくても分かる、確かめるまでもない！！

ジャバウオック！！！

チェーンソーが石を切断するような背筋の凍る音がする。

これは鳴き声だ、あいつが獲物を見つけた歡喜の雄たけひだ。さたまは、鳴き声が背後に迫り、警告が本能で爪を立てる。

けたたましい鳴き声が背後に迫り、警笛が本能に爪を立てる。勘だ

「ガズヨリニ薺薺古ビ、歯々才ハルニ、弊才故ニ、

が  
身代わりになつて。

間髪いれず飛び出し駆ける。

追いつかれまいと少年は逃げる。たつたひとつの救いを求めて。

+

時間は始まりより、さらに前へ戻る。  
すべての発端、帽子屋のお茶会でのことだった。

常夜がのさばる森のはずれ。

崩れかけた教会は廃墟のようで、しかし闇に対抗する明かりがポツリポツリと健気に頑張っている。

その教会に入つても、子を抱える聖母像も十字架にかけられた聖人にも出会えない。

本来祭壇があるべき場所……そこでは、ふんだんに盛りつけられたパイやタルト、クッキーなどを囲んで3人と一匹がくつろいでいた。

私、アリスもその一人。

「あらまー、アリスちゃん！ どうしたのその痛々しい怪我は！？」  
「ん……。まあけょっとね」

そんなに立つだらうか？

「ああ、せっかく綺麗なお肌なのに……もつたいないわよ。ちゃんと手当をしたのかしら？」

わたわたと荒てる帽子屋に、私は氣のない返事を返す。

「…………」のままで、いいの

最低限の消毒しかしていない頬の怪我を撫でる。ピリ、と走る痛みに顔をしかめると、いまでもあの悔しさが甦る。

私のせいでお父さままで怒鳴させてしまった。

グイ、と手元のウインナコーヒーを飲み干した。豆を厳選するところから丁寧に気遣われた一品のはずが、ただの苦味しか感じない。口の周りについたクリームを舐め取る。ほどよこ甘さ。

「ああもひ、ちゃんど味わつてよアリスちゃん。一氣飲みするもの  
じやありません」

めつ、と帽子屋は残念そうに羽耳を折りたたんだ。耳がある位置に  
鴉の羽が生えていて思つように動かせるのだ。

夜に溶け込む漆黒のシルクハットとスースをそつなく着こなす男、  
帽子屋がこのお茶会の主催者だ。

といつても振舞われるものはコーヒーであつて紅茶ではない。昔は  
紅茶派だつたらしのだが、ある人物のために宗皿を変えたそつだ。

……は。人喰いにしては健氣なことだ。

半ばヤケ氣味にそつ思つて、白百合のようなテーブルの中央に手を  
のばす。田的のクッキー（イチジク味）を無造作にひつ掴んで口に  
放り込んだ。

「まつたくもひ、アリスちゃんたひ。それで、おかわりは  
いり?」

「……もうこいわキサト。ありがとひ」  
「じやあコンジユちゃんは?」

帽子屋 キサトの声にペツトと戯れていた男が顔を上げる。

白くて短いウサギ耳を生やした男、円珠。<sup>えんじゅ</sup>彼は膝の上にじゅれつく  
少年の頭を撫でる手を止めて首を振る。

「……こや、もひいー」

その男は目元を黒い布で覆い隠している。彼は盲目なのだ。

「うへ、ホントにもう飲まない？…………腕に自信がなくなるわあー」

キサトは大きさに肩を落とした。

私に断わられるより、円珠に断わられる方がダメージがでかいのだろう。楽しんでもらえているのか不安で仕方がないと。彼（正確には男ではないのだが）は、いつだってキサトにそっけない。

それを見て不憫に思ったのかキサトの前に一つのカップが差し出される。

「む、むーー」

先ほどまで円珠にじやれ付いていた少年だった。耳と下半身がヤマネの愛らじい子供だ。

「…………こ子ね、マーマちゃん。でもなんだか余計に空しくなるの」

「…………む？」

キサトは一人いじけてテーブルに突っ伏した。彼の本性にそぐわぬ天使の持つような金髪が帽子に隠れて見えなくなる。

その時だった。円珠の耳がピクリとそよぐ。少し遅れて私も気がついた。

「あらあ、これは…………クロノちゃんかしり。いつも騒々しいのに今日は無言で登場なのね」

「…………」JNやJNや隠れながら移動してるような気配ね

私も不思議そうなキサトにあわせて頷く。気配はあと到着まで20、10、8、6、……、ゼロ。口ゼロ。

「う、ひひひお邪魔します、う、……」

からりとした黒髪に同色の瞳とウサ耳と尻尾。予想通りの少年案内人の黒乃が奥の窓の方から現れた。

そこから現れるということは裏から回ってきたのだろうか。ずいぶん複雑な森のルートを通りてきたようだ。

少年はなんだか疲れきってよろよろしている。

そのまま何とかテーブルまで辿りつき、キサトの引いてくれた椅子にふりりと座つた。そして少年は座るなり、背もたれにダラリと身を任せきっている。

「なにやつてんのアンタ」

「あひ……いきなり不機嫌だねアリス。……、ぐすん  
「むー？」

じてじてと近寄ってきたヤマネ少年が黒乃の袖を引く。びつしたの？とでも言いたげな顔で。

「ああ……優しいなあマニイは。僕に優しくしてくれるのマニイと田珠さんぐらいだよ」

首を傾げるマニイを抱きしめ、黒乃はメソメソと泣く。実に鬱陶しい。

「あら、私は優しくないってこいつの？」

キサトは新しいコーヒーを淹れていた。そう言いながらも大して気分を害していないようで、出来上がったそれを黒乃の前に置く。ミルクは多めだ。

少年は手を持ち上げるのも億劫なのか、じろじろとカップを口に持つていく。

「優しいも何も……キサトさん僕に欠片かけらも興味ないでしょ」

「そうね」

たつた3文字であつさりと言いのける。態度は紳士だが、キサトの中身は鬼か魔王だ。

キサトは一見、優しく平等に振舞う。しかしそれは飽くまで一見でしかなく、彼にとつてはたつた一人以外はどうでもいいが故の平等さなのだ。もちろん私も例外ではない。

「……で、一体どうしたのよ。逃げ足だけは女王も呆れるあんたが、何でそんなに疲労困憊なの」

私はキサトが切り分けたタルト（これもイチジク味）にフォークをさす。キサトの手作りお菓子はほとんどイチジクがメインだ。この果実の味が、一番死者のそれに近いというのが理由。

「そうそう、聞いてよアリスト……頼みがあるんだ」

「頼みい？」

「うん……ほら、知ってるでしょ？ 何でか僕ってアレに狙われるってこと」

アレといふと……。

黒乃の言葉に円珠がピクリと反応する。

「……ジャバウォック？」

「そうーそうです田珠さん。最近見なくなつたと思つたのに南<sup>ニアス</sup>プロックでまた湧き出したらしくって……」

「あらあら

と言いいつつもキサトは黒乃を見ていない。彼は考え込む田珠を気遣わしげに見守つてゐる。

私は何でもないよう訊ねる。

「……それがこっち、北ブロックにも湧き出したつてこと?」

「ううん、南<sup>ニアス</sup>ブロックからこっちに流れてきたみたい。一匹だけだつたし……」

「で、遭遇したのね」

「うん……さつき。な、なんとか撒いたんだけど……」

黒乃はその恐怖を思い出したのか震ざめて震える肩を抱く。なるほど、それならこの様子も納得がいく。

ジャバウォックとは『手当たりしだい』と呼ばれ恐れられる怪物だ。この人喰いが森<sup>ひじめ</sup>にあつてなお、異端とされる異邦者<sup>よそもの</sup>。どうして発生したのか、"城"のほうでも調べがつかないらしい。

人喰いも死者も案内人も関係ない。奴にとつては目に映るものすべてが食料であり、それこそが異端たる所以の一つである。

「城に陳情してほかの案内人を回してもらつたら? 討伐隊の出る一大事じゃない」

「い、いま南に手一杯だから、一匹ぐらい自分で何とか、しり、つて」

「……そんなに余裕がないの？」

それもおかしな話だ。いや　　単にこの子が後回しにされただけか？

黒乃はなぜかジャバウォックを惹きつける。それはもう、人喰いを惹きつける死者のようだ。彼さえ野に放つて逃げ回らせておけば、他の案内人には田もくればしまい。あの女王らしい非情な決断だ。

つまり南が片付くまでの時間稼ぎをしてやる。

「逃げ足が速いのがあだになつた訳ね。『愁傷様』

「うわあああん！やつぱり、やつぱり、アリスもそう思つた！？  
僕もそうじやないかと薄々ああーー！」

今もジャバウォックは黒乃を夢中で探し回つてゐるところだ。

「見捨てられたんだああ……」

「……手伝おうか、黒乃」

と、円珠が助け舟を出す。彼にタルトを切り分けていたキサトが、やつぱりと溜息をついた。そして黒乃を笑顔で威圧する。

『円珠に危険なことをさせやがつたら唯じやおかねえぞ』といふセリフがキサトの背後に黒々と見える。

「……うう……嬉しいですけど遠慮します。むしろ命を狙う敵  
が増えちゃいます」

「？」

「？」

「？」

首を傾げる田珠とマーメ。気づかなければ幸せだ。

「…………ああ、もしかして頼みつてそれ？」

「うそ、そりなんだ！ アリスお願い、案内手伝つておくれよー。」

「…………はあ」

「あらまあ…………藁にもすがる思ひなのね、黒乃ちりん

「私つて藁なわけ？」

「うそ」

私はひとり興味のない顔を装つて思考の海に沈む。

もし更なる怪我をしてしまつたら

そつすると、またお父さまに心配をかけてしまつ。それせまつきっと嫌だ。

でも。

でも、アリスは一人でも戦えるのだと、そう示したいとこ  
う想いが確かにある。

もつお父様の手を煩わせたりなんてしない。心配などいらないのだ  
と。

「明後日、案内の仕事が入つてるんだ。逃げるだけなら何とかなる  
し、城に留まつておつちほ安全だけど…………」

黒乃は涙をうかべて必死で訴えてくる。

「さすがに死者を守りながら逃げ延びるのは厳しい…………うそ、  
不可能だよ」

可愛そ「」。

その死者も黒乃のとばっちりを喰らって、女王に見捨てられたのだ。案内人としては下の下である黒乃だ。担当する死者も重要度は低いのだろう。

「うう……僕、バリバリって食べられただ、あひとお……」

「いいじゃないの。あんた痛いの好きでしょ」

「いや死んでもいいほど、ドミじゃないよ！？」

正直私はこいつがどうなると知ったことではないが……。

「僕この仕事蹴れないんだよう、崖つぶちなんだ！ 今度案内に失敗したらどうなるか」

「まあ、間違いなく白紙班行きでしょうね」

死ぬまで城の地下でこき使われると言ひ、案内人にとって恐怖の代名詞である班にこ招待つてところか。

「お願いアリスツ！ 僕に出来ることなら何でもするから……！ ね！？」

「何でも……ねえ」

私は決心を固める。決して誰にも知られないよつて、顔には出さずとも。

「…………まあ、それならいいわ。頼まれてあげる」

「ほんとつーーー？」

黒乃が輝く笑顔になる。感情のスイッチがパチパチ切り替えの激しいことだ。

「アリス、アリス、ありがと……！」

ガツ。

抱きついてきた黒乃の頭をガシ掴んで剥がす。そんなぞんざいな扱いでも黒乃は笑顔だつた。

「……珍しいな」

「……珍しいわね、あの面倒くさがりのアリスちゃんが」

「むーー。むーー！」

うるさい外野。

素直に喜ぶ黒乃とは対照的な訝しむ声を、右から左と聞き流す。

「……はあ。それで？」花は一体どこに咲くのよ

腕を組んで見下ろすと、黒乃は二二二二と涙をぬぐつて頷く。

「えつと、それはね

」

それが単純な計画の始まりだつた。

アリスは青年に対してやましいことなど何もない。

ただ話していないことがあつただけなのだ。……まあ、多少意図的であれ。

アリスは言った。この森にいるのは”人喰い”と”死者”と”案内人”

そして”例外”が少し。

アリスの言葉に嘘はないが、真実すべてを語った訳ではない。  
その例外の中に、死者にとつて致命的なものが含まれていたという  
だけだ。

あらゆる生物の天敵である、ジャバウォックという怪物が。

## ウサギのかいり騒ぎ 4（後書き）

一応フォモではないとフォローしておきます。

お茶会の部分はスラスラと会話が出てきて楽しかったです。  
やつと登場人物が出揃つてしまいりました。

ここまでが第一話『ウサギのかいり騒ぎ』の前編で、次からが後編に  
あたります。

## ウサギのかいり騒ぎ 5（前書き）

ちょっとだけ文章校正しました。

話の筋的には変更はありませんので、確かめなくとも大丈夫です。

「うちは……マズい。

「…………本当に、うちはなんですね？」

「…………ああ」

青年に思わず確かめてしまつたほどにせ、やつかいな領域に私たち  
は向かつてゐる。

「ふんふん、これはまた」

「ディンガーはニヤけながら道の先を眺めて呟く。

そのふよふよと幽霊のように憑いてくる男の顔は、これから確実に  
起じる面倒な事態が楽しみで仕方ないと物語つている。

ただの案内がどうしてこつも困難になるのか。

想定していた最悪のパターン全てを網羅していく勢いでついてない。

そもそもあの遅刻魔くわのが責務を果たしていればこんなことにはならな

かつたのに！

「……絶対に、私のそばを離れないでくださいね？」

念を押すと、前を行く青年はわかつていて咳く。私はどう説明するべきか、一息あけて考えた。

「あの一際目立つ大きな木が見えますか？あの腐食して半ば崩れかかっているあれです。あそこから先にはキノコの群生する丘がありまして、」

「人型の人喰いがいるのか？」

「…………その中でも突き抜けてヤバいのが」

主に性格が。

カウント・スワロウテイル  
揚羽伯爵。

その人喰いは三度の飯よりも人間の苦しむさまが好きという変人だ。小食であるにも関わらず、一日の殺人數は森でもトップクラスだろう。

同じ上級でもディングガーとは危険度が違う。それは爵位を城から与えられている時点で明確だ。

爵位といつてもそれは人間界のように特権や領土がある訳ではなく、人喰いたちの危険度を表すための目安に、忌避と恐怖を込めて送られるものだ。

それは力の強さも多少は関係しているが、何よりどれだけ悪質かという意味合いでランク付けされている。

ブラックリストのようなものと思えば良い。

「ディンガーが人間をめちゃくちゃに壊していたのは、子供が虫の手足をもいでみるようなもので、こうしたらコレはどうなるんだろう、とこうあくまで興味本位の行動だ。」

「満腹なら特に危険はないし、無差別殺戮も行わない。そもそも食欲より好奇心を満たすことを好む彼は傍観者が多い。」

「……考えが子供そのものなので、予測できない動きをする」ともあるが、

「ディンガーが私の隣に移動し肩を慰めるように呟いてきた。ものすくわざとらしい。」

「うんうん、とってもとっても大変だよねえ。分かるよアリス。でもさ、遠足ってのはやっぱりこれぐらいワクワクしないとね。ね？」

「……」

「やつぱり遠足程度の気まぐれか。」

「ディンガーに胡乱な視線を向ける私。」

「ふふ、アリス、この先はキミがよくお世話になつてる人喰いのところだしねえ。何が起きるか楽しみだね？ね？」

「…………はあ…………。否定はしないわ。楽しみつてところには反論したいけど」

「伯爵と父が懇意なので、それなりに付き合いは長い。奴が私に危害を加えないのは、ひとえに私が父ヴェノムの養女だからといつ、ただそれだけの理由だらう。」

青年はもう何も言わなかつた。

私たちの会話は聞こえていたはずだが、ただ淡々と歩いている。

時折木々の間から視線を感じることがあるが、一定の距離を保つたまま何かが近づいてくる気配はない。

低級の人喰いがデインガーにビビリながらも、襲い掛かる隙をうかがっているのだろう。

油断なく周囲に気を配つていると青年の足が止まった。目印のようにそびえる大樹の根元、しかしそこからは様子が一変していた。

「出口の方角は間違つてないんですね？」

再度確認する私に青年は小むく顎く。

「……やつぱりここは避けて、大きく迂回しませんか？」

「まだ呼び声が小さいから……。へたに迂回して聞き取れなくなつたらまずいと思つ」

「そう、ですか」

氣乗りしないが仕方がない。

ああ、つぐづくあいつがいれば話は簡単だと言つの……。

「うわー、ここ来るの久々だなあ」

デインガーの至つてのん気な声が、頭上から降つてくる。見上げると大樹の枝の上に悠々と寝そべつているお氣楽道楽野郎が。

「壯觀かな、壯觀かな。 ほら見て『うんよ、人間の坊や。 見渡す限りのキノコ景色だ』

「い、意外に大きいんだな……」

青年が呆然とキノコを眺め仰ぐ。

まだキノコとの距離は充分にあるが、近づくことはお薦めできない。

大小さまざまのキノコが、それこそ小指大のものから2階建ての建物並みのものまでが、それらを上回る巨大な木々に所狭しと巣食っている。

キノコはそのどれもが激しい色彩を身にまとい、一つとして同じ模様がない。

うつすらと妖しい霧が立ち込めて完全に奥まで見通すことは出来ないが、その毒々しい存在感は視覚に暴力のように焼きつく。あらゆる養分を吸い取られたかのように木々のほとんどがぐずぐずに変色している。

その異様な支配領域に見入っている青年。

さつきから嫌な予感しかしない。

「もう一度言いますが、絶対に！ 私から離れないで下さい。いいですか、このキノコは……」

「アリス、あつちだ」

「つ、……え？ ……あつ、先行するのは危険です！ せめて私の後ろを歩いてください」

前に出て、青年を隠すように背後に押す。

ここは陰険な奴の領域だ。彼に先をいかれては罠があつた時に対処できない。

「デインガー」

「はいはい、つと」

顎で指示し、デインガーを一番後ろにして私たちは歩き出した。デインガーを信用する訳ではないが、青年を最後尾になどできるはずがない。

ああ、黒乃、お願ひだから早く来て……、そして一発殴らせろ。

チョシャ犬のはしゃぐ声をBGMに、乱立するキノコから成るだけ距離をとりつつ、それに乗つ取られた巨木の合間にジグザグと縫う。だんだん奥に行くに従つて霧が濃密になつてきた。一寸先は白濁の闇、とまではいかなくとも、確実に視界は狭まつていく。人喰いにとつて何とも有利な環境の出来上がりだ。

「ほどんどど」を歩いているのか分かりませんね。出口の呼び声がなければ遭難しているといひですよ

「…………」

一体どれぐらい歩いたのか。

5分かもしれないし、1時間かもしれない。それとももつとだらうか。

行けども行けども変わらぬ景色に、時間の感覚まで麻痺してきた。

アリス、と青年が私の名を呼ぶ。

「出口の方角が変わりましたか？」

「ああ、あつちの…………」

私は青年の示した方向に歩みを修正しようと

して、

「…？」

濃霧が。

分厚い霧がなんの前触れもなく膨れ上がった。  
煙突に突っ込んだのかと勘違いしそうなほどの濃い霧が私の視界を奪う。

「ヤレ」を動かないで下さい！」

殺傷性のない逃走用の爆弾トランプを取り出す。すばやく地面に叩きつけ、吹き荒れる爆風で霧を払つたが時すでに遅し、だつた。

「…………」

まるでこの機会を伺つていたかのよう、青年は姿を消していた。  
……いや、まだ遠ざかる気配が感じられる。推測より青年の足は速かつたがまだ追える！

「デインガー！？」

「いやあ、いやあ、まさかまさか。一気に霧が濃くなるなんて思わなかつたなあー」

「つ、どう考えてもあなたの仕業でしょう……」

さつきの霧はあまりに不自然だった。

それも伯爵の気配など微塵も感じなかつた。青年の意図に気づいたデインガーが、面白半分で手出ししたのだ。  
……やっぱりこいつは碌なことをしない！

暖簾に腕押しと、口論する暇も惜しんで駆け出す。

「いやー大変。こりやあ予想外つ！」

「いいから黙つて！」

「全速ダッシュで喋つたら舌噛むよアリス？」

「なら黙つてて！？」

「それは無理!、僕は口から先に生まれたんだと曰ごう豪語を」

「あ、あそーーー！ 知ったことじやないわよ！」

チエシャ犬は手をポンと叩いてさらりと、

「あの人間が言つてた、『出口が遠い』つてアレ嘘だつて気づいてた

『 』

読み違えた。何より自分に腹が立つ。

拳を強く、強く、ギリッと握り締める。爪が皮膚を突き破つて血が  
にじむほどに、強く、強く。

出口の位置が分からなければ、私じゃ黒乃と合流できない。黒乃がいなければ『手当たりしだい』を見つけるのは難しいというのに。森はあまりにも広大なのだ。

黒乃、一発で済むと思わないでよつ！

\*

一方、アリスの危険な決意を知る由もない黒つわざ。

「つとあああああ！」

黒乃是死に物狂いで駆け抜ける。

唯一自慢できる逃げ足は存分に發揮され、枝から岩へ、岩から磨耗した石像へ、その先に待ち受ける断崖絶壁すらものともせずに飛び降り着地。

その着地点から流れるように飛びのくと、間一髪、腹に響く音をたててジャバウォックがそこに降り立つ。

「つひい！ ああああアリス様、神様、女王陛下ああああああ！」

涙を惜しげもなく滂沱と流し、凍える恐怖を肺腑から絞り尽くさんと叫ぶ。

背後のバキバキと難き倒されていく木々の悲鳴に顔が引きつる。

その音と奴の気配だけで敵との位置を測りながら、少年の命を懸けた障害物競走は続く。

「つて、つひー！」

とつせにしゃがんだ頭上をジャバウオックの尾が通りすぎる。膝を曲げた勢いのまま前転して、一瞬の間も置かず跳ね起きる。少し後頭部を掠めたのか、じくじくとした痛みが脳に伝わる。「はう、良い感じの痛み……じゃないじゃない！」

走る、走る、ひた走る。

首に下げた銀鎖の懐中時計が、黒乃の心音に同調するように激しく跳ねる。

「もお、もおいやだあ　　……！」

巨大キノコが群生する一角に、頭を空っぽにして突っ込んでいく。

黒乃、アリスといつゴールまであと少し。

ウサギのかり騒ぐ 5（後書き）

お、お久しぶりです。

プロローグを除いた全話、微妙に改稿しております。

本筋はさして変わりないのでご安心を。

お読みくださいありがとうございました。  
次回は青年視点でお送りする予定です。

## ウサギのかいり騒ぐ 6（前書き）

ちょっとだけ文章校正しました。

話の筋的には変更はありませんので、確かめなくとも大丈夫です。

「こんばんは」

僕がここに田観めて、まず認識したのはアリスと名乗る少女だった。

ふわふわとしたチョコレート色の髪に、鮮やかな新緑の瞳。漆黒のエプロンドレスを身にまとい、コンバットナイフを携えて闘う少女に、最初は面食らつたものだ。

死者の森に、人喰い、案内人。

死後にこんな世界が待ち受けていると知つたら、自殺する人も減るかも知れないと思った。

この森では誰も信用してはいけません。

出口が貴方を呼んでいるんですよ。

残念ながら、この森ではありふれたことです。

……疑いますか？

。…………。

「で今回、案内人の代理を頼まれてるんだってさー」

彼女がもし人喰いであるなら、案内人の振りなんてまじめっこしいことをする必要はないだろう。出会いがしらにとつとと食べてしまえばいいのだから。

でも上級の人喰いであるなら、それこそ獲物をなぶる猫のよつこ、気まぐれな遊び心を起こしてもおかしくない、…………のかもしけない。

けれど彼女の一見冷静な態度に混じる、抑えきれない苛立ちや焦燥感………… それは演技なのだろうか？

「…………あっちから声がする。…………まだ遠い」  
「ええ。行きましょう」

いや、アリスが何であろうと関係ないのだ。もう。

出口の呼ぶ声は、確実に近づいてきている。  
きっと、そう離れていない場所だ。

アリスを振り切り独力で出口へ。今はその機会を窺おう。

\*

嫌だ。

嫌だ嫌だ。

嫌なんだ。

僕は消えたくなんかないんだ。

君を追い詰めたこの僕が、死んで当然のこの僕が、  
「口サレテ当然のこの僕が生きたいなんて、どれほど恥知  
らずな願いか知つていても……それでも。

だって、死んでしまつたら

じゃないか。

\*

まるで銀世界を彷徨うつゝ。』

立ち込める白霧が視界を占めて、雪山で遭難したかのような不安感に襲われる。

それでも僕はひたすら走る。

走るために生きてきたのだと勘違こしそうなほど必死に走る。

おいで

脳に直接響く呼び声は、もうすぐそこから聞こえるの。』

ひつち

ひつだよ

出口までここにあるんだ。

いや、そもそも見ただけで出口と分かる外見をしているのだろうか。同行者と別れたことに少し後悔しかけるが、何を今更と首を振つて、沈みこむ思考を振り払う。

頭の中にまで霧が侵入したのだろうか。だんだんボンヤリと考えることが億劫になつていいく。

ここにいるよ

近い。

それにしてもこの招き声は、どこか聞き覚えがあるような……？  
ああ、駄目だ、頭が霞がかつて何も分からなくなつてくる。僕はどうしたんだ。

ここにいるんだ

終わりの見えないキノコの迷路。

独りでいることに精神が絶えられなくなつたのか、道の先に人影を見たような気がした。

その幻は幻とは思えないような確かな実体を持つて僕を手招いてくる。

風に踊るストレートの黒髪、愛おしげに目を細めている、その人はまるで……。

「

幻が僕の名を呼ぶ。優しく、優しく、囁くよう

小さく、けれど不思議に僕へと届く声。

ああ、もしかして、田口とは君のことなのか？

その幻の田の前にたどり着く。  
幸せだったあの日のようになり、君の微笑には陰りの一つもなく、それがただひたすら嬉しい。

泣きはらしたと一田で分かる赤い田じゃない。  
無言で憎しみをぶつけて来ることもない。  
不幸や穢れなんて知らないような、……聖母のようになれる穢やかな微笑みは思い出のままだ。

「うつてあんなことになってしまったんだろうね。

」最後に、うつしても伝えたかったことがあるんだ

今の僕は、懺悔する犯罪者みたいな顔をしているだろう。……事実その通りだけね。

君はまだ微笑んで、ふわりと僕の頬へ手をのばす。  
泣かないで。

そう言つているよつた気がした。

「

ああ名を呼ばれる、たったそれだけのことで、最後の瞬間が思い出されてしまつて苦しい。

…………僕という原因を排除して、君は幸せになれるだらうか。  
今キミはこの微笑みを取り戻してくれている?

「ねえ、…………僕は…………僕はね」

彼女をこの腕で抱きしめたくてゆっくりと手をのばし、

ダン!!

きいあああああああ!

「…………、…………え?」

大地を踏み抜く力強い音がした次の瞬間、彼女の額にコンバットナイフが突き立つていた。

「騙されないでください!」

背後から追いついたアリスが、ふら付いた彼女と僕の間に降り立つ。

「な、なんで」  
「アレが人間に見えますか…………?」

な、何を言つてゐるんだアリス。

だつてほら、あんなにもナイフの刺さつた額から、血が流れで

……な、い？

「ちょっと失礼致しますね」

「は？」

……思いつきり頬を殴られた。……普通そこは張り手じゃないのかアリス。

そのお陰かどうか分からぬが、ぼやけていた思考に活が入る。散らかっていた意識が焦点を結び、現実感を伴つて殴られた部分が痛み始める。

「…………きの」「だな」

「ええ、キノ」「です」

彼女の姿はすでになく、そこにはあつたのは身をくねらせ悶える巨大な毒キノ口だつた。

そのおぞましい姿に自然と後ずたる。

「だからキノ口には氣をつけてください」と言ったのに

「アリス……」

しうがない人ですね、と顔に書いてあるアリスを見る。よほど急いできたのだろうか、少しだけ頬を上氣をせて息も荒い。

「…………その。すま、ない」

「もうこんな無謀な」とは、一度としないでくださいね

「ああ。もうしない」

「…………よろしく」

したり顔で頷くアリスに、どこか安堵する自分を感じて不思議になる。

決して疑う気持ちが消えたわけではないけど……。まあどこの道ひとりで、出口にたどり着くなんて出来ないとわかつてしまつたから。

あと一步で、あの醜悪なキノコに喰われていたと思つと、背筋に冷たい怖気が走る。

何よりもキノコの化けた彼女を……一時でも本物と思つてしまつた自分に腹が立つ。本当に彼女を愛しているなら、偽者だと氣づくべきだったのだろう。

「あれー、なんだもう終わっちゃつたの?」

幽靈よろしくふよふよと追つてきたチエシャ犬は、ぶーぶーと口を膨らませている。

しかし、アリスは実に嫌そうに首を振る。

「はあ、分かつてゐくせに適当に言つてんぢやないわよティエンガー。無論これからよ」

これから?と疑問に思つ間もなく。キッと、アリスは背後のキノコを仰いだ。

「やつでしょ、カウントひ  
「よおアリス」

僕らが背にした毒キノコから声が降つてきた。正確にはキノコの上から。

禍々しいその怪物の上で胡坐をかき、有閑なしぐさで水煙草を嗜む  
男が一人 、当然ながら上級の人喰いだろ。

「ふうん、人間を連れてるなんて珍しいじゃねえか。 保存食用か  
？」

その男は傲岸不遜な笑みを口元に、アリスを意味深に見下ろす。 そ  
してひとつ煙を吐き出して。

「うん？ それとも土産か？」  
「…………はあ。 どいつもこいつも…………」

男の科白セツフはどつかで聞いた様なものだった。アリスは疲れた溜息を  
吐いた。

## ウサギのかじり歯 6 (後書き)

またもやさうっと短めですが。

あとラストまで2、3話ぐらいかと思われます。

## ウサギのかいり騒ぎ 7（前書き）

ちょっとだけ文章校正しました。

話の筋的には変更はありませんので、確かめなくとも大丈夫です。

『幽霊の正体見たり枯尾花』とは言つけれど、その花が化け物だった場合は洒落にならない。

ざわざわ。

ざわざわ。

ざわざわざわ、と。

次第に濃霧が晴れ、キノコの樹海はその正体を現していく。  
ざわざわと揺れだす気配、それは私たちを取り囲む毒キノコたちの  
蠢動する音だ。

伯爵の出現を歓迎するかのよつて、不気味なざわめきが満ちていく。  
私の隣の青年が、落ち着かない様子で周囲を窺つている。それでも  
視線を伯爵から逸らそうとしないのは、本能が目を離してはいけな  
いと警告しているのか。

「くく、お父様のお使いか？アリス」

「『じきげんよう』伯爵<sup>カウント・エス</sup>。残念だけじはずれよ」

瑠璃アゲハ蝶の翅を背に生やした、黒灰くろの男

カウント・スワロウテイル  
揚羽伯爵<sup>カウント・エス</sup>。

奴はニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべて、煙を一つ吐き出した。しかし嗤つてはいても目に感情はない。まるで道ばたの石ころを眺めるような視線。

「ふうん？なら聞くが、何だつて人間のお守り何ぞしてやつてんだ？」

「あなたには関係ないでしょ？」

「関係ない？へえ」

くつくつと嗤う伯爵。

彼の視線が、ナイフが突き刺さつたままの蠢くキノコを見やる。それは次第に動きを弱め、やがてクタリと動かなくなつた。

「あーあ。俺のかわいいかわいい子供をブツ刺しといて、まあ言つセリフじゃないわな」

「……かわいい、ねえ」

きっとここは本気で可愛いと思つてゐる。相変わらず趣味の悪いことだ。

「…………アリス」

「あのキノコたちはほとんど思考能力を持ちませんが、一応低級の人喰いです。あの伯爵の手下のようなものですね」

私が青年にそれとなく説明すると、彼の喉がごくりと鳴つた。キノコたちの合唱は未だ止まない。

それらは伯爵の手足となる代わりにおこぼれに預かるという、共生・忌避・従属の内、最後の項目を選択した者達だ。

伯爵の指がついと動き、その動作に引っ張られるように、死骸に刺さっていたナイフが彼の手に納まる。

彼はキノコの体液に濡れそぼったソレを一振り、元の輝きを取り戻した刃を見せつける。

「しかもせっかく俺の作ってやったナイフで。アリス、お前は血も涙もないのか？」

やれやれとワザとらしく首を振る伯爵に、私は肩をすくめる。このナイフもトランプも、私の使用する武器の全ては伯爵のお手製だ。

ただの人間である私がこの森で生き抜くために、父が彼に製造を依頼した品々である。

「そら

」

伯爵が危険な速度で投げ渡してきたナイフを、指で挟みこんで喉元の手前でとめる。  
私はにっこりと。

「敵には一切の容赦なく、ってね。そうね、お父様に似たのよきっと

と

「……ほお

返ってきた反応は予想通り。伯爵の翅が不穏にざめく。

「……ヴォノムに、人間」ときのお前が似た、と?

人間をオモチャヤ程度にしか見ていない奴にとっては、これほど不快なセリフもないだろう。

「へえ……悪いなアリス。今のは笑うところだつたのか？」

「ええ本当に。めずしく気が利かないわね、伯爵」

「そうかそうかすまなかつた。ところでアリス、ヴェノムのかわいいアリス。俺はぐだらん冗談なんてのを飛ばす奴は死んでいいと思うんだがどうだ」

ざわざわ。ざわざわ。

空気が徐々に変質し、あからさまに口調に棘が混じる。剣呑な気配を帶びていく。

さつきまでの威圧感が針の筵むしろだったといつなら、今は毒針の筵といつたところか。

じわじわと身体を蝕み、気がつけば手遅れになつてゐる、そんな溶かしていくようなゆるやかな猛毒。

「な、なあアリス、何かまざい方向になつてないか……？」

「……大丈夫です」

「そうは思えないけど……」

微笑んで落ち着かせよつとしても、青年の怯えた表情は和まない。それはそうだろう。

霧の晴れたこの一帯には、そこかしこに死骸が転がつていたのだから。

ひしやげた髑體しゃねいばく、風化しかかつた骨、乾ききつて黒ずんだ血の痕。

それらがキノコの根元に散乱し、青白い月光に浮かび上がつてゐる。

ファンシーで毒々しいキノコの色彩が、その黒質を際立たせていた。

食べ残しなどがないため、悪臭がしないのが唯一の救いであつた。

おそらくキノコが骨以外の全てを綺麗に食べつくしてしまつた。

だ。

確かに、私では伯爵ほどの大物には勝てない。お父様の後ろ盾がなければ、さつきの時点では死んでいる。

けれど反りが合わないというだけで、考えなしに挑発したりはしない。もうすぐ 機会は来る。

ざわり、と森の気配が動く。

遠くからかすかに騒々しい気配がして、しかし私に神経を集中している伯爵はまだ気づいていない。

彼は煙をひとつと吐き出し、冷ややかな視線で私を撫でる。

「……は。かの公爵に似ているとま。ずいぶん大きく出たものだなアリス」

「いいええ、別に。そんな意味ではなかつたんだけど」

「こ、公……爵？ アリスの父親が……」

「ふん、誰が父親なものか。この子豚が勝手にそう呼んでいるだけだ」

「あらあら伯爵。もしかして羨ましいのかしら」

「……身の程を知れと言つて……」

ざわざわ。ざわざわ、と。

伯爵の機嫌が下降することかられて、キノコの合唱が激しくなつていく。

「あははっ！ まー、まー、そんなのどうでもいいじゃん。あ、そ  
うやう久しふりい、お蝶伯爵っ」

チョーシャ犬の暢気な声が割つて入る。空気を読んだ上でぶち壊すの  
が彼である。

「……チョーシャ犬か。その呼び方は止めると何度言わあ分かる？」  
「ええー、そんなの俺の自由だつてばあーー。ねえアリス？」  
「あんたはとことん自由よねえ……」  
「だつてさ、おちょー伯爵」  
「……いや、いい。お子様に何言つても無駄だつたな」  
「あつ、ひどいや、ひどいよ！ 僕は、子供じやないよー。」

びつでもいい、と心底面倒くさそつこじつと手を振る伯爵。ぶ  
ー、ともくれるチョーシャ犬をぞんざいにあしらつている。

「……それよりも、だ。俺の質問にまだ答えてねえぞ、アリス」  
しかしそんな反応を見越していたよつて、チョーシャ犬は口に手をあ  
ててニタリと笑つた。それはもう楽しそつて。

……今回ばかりは、こいつの考え方でいることが私にも分かる。

「…………？」

伯爵が身じろぐ。やつと近づいてくる不穏な気配に気づいたのだろう。

「ふふつ、そうだねえ伯爵。それよりも何で、アリスが人間と一緒に

にいるかだつたね。

教えてあげなよ、ねえアリス」

「ええ。いいわよティインガー」

出口が近いかじかみ、青年はひとりで逃げるなどとあんな暴挙に出たのだ。

ギノエの森に入る前は彼の嘘に騙されていたから、こんな手段は五分の賭けだったけれど、ここが終着点なら話は別。

「私はね、黒乃に手伝いを頼まれたの」

「出口があるなが、必ずあこつと山流だね。」

吸い口をカラリと落とした。

「見つけたっ！ たっ、助けてアリス――――――――！」

一心不乱に黒乃が駆けてくる。あらゆる障害物をなぎ倒しながら飛  
んでくる怪物を引き連れいてる。

青年は思わず私に一步身を寄せる。恐怖ゆえの反射行動でもあつたのだろうが、それでも私の傍から離れる気配がないということは、父が公爵と知つてもそれほど動搖していないとということだろうか。いや今更そんな事実が判明したところで、私の怪しさは以前変わりないとそれだけの事かもしれない。

見えざる脅威より、目前の脅威。そういうのとだりつけ。

「う、わ、こ、うつちに来る……！ あれは……？」

「ああ、あれはジャバウォックという異分子です。あの子供は……、

「ついあえず説明は後で」

私はトランプを黒乃の背後めがけて投げ打ちジャバウォックを牽制する。それらはやつの皮膚に接触すると同時に起爆。振りまかれた煙がジャバウォックの視界を塞ぐ。

これぐらいの火力で傷を与えるとは思っていない。

黒乃是その俊足でいつきに距離をつめて、私の背後に駆け込む。自分の守るべき青年にも気づかないほどの中慌つぶりだ。  
なんとも情けない。

「…………あんたねえ」

「ああああ、アリスト！ ょ、よかつたあああ

僕生きてる、と安堵の涙を浮かべる少年は、そこではたと氣づく。トランプ爆弾を握り潜ったジャバウォックが、様子を窺うように滞空していたのだ。

3つ首の恐竜に似たその怪物は、上級の人喰いを警戒しているようだ。

チエシャ犬は我関せず、少し離れた場所から一ヤーヤと状況を楽しんでいる。

「あ、えつと？ 」二つて伯爵の…………。 わあ、お久しぶりです  
ラピスラズリ伯爵！」

やつと周りが見えてきた黒乃が、毒キノコを振り仰ぐ。

伯爵は水煙草を取り落とした姿勢のまま固まっていたが、眼が合つと同時に見えてはならないものを見てしまったかのように身じろぐ。

「…………う、く、黒乃…………」

「えっ、ど、どうしたんですか、ぼ、僕なんかしましたか?...」  
「…………い、いや…………」

心なしか青ざめた伯爵に、おもむろに黒乃の首を黒爪で掻き切った。

「い、わつー? 頸動脈近つ! ? ちょっと、ひやうう血が! 血が!  
今それどこつ……じゃ、な…………! あうう」  
「わー、とか言いつつすごい顔赤いねー。うわー、恍惚つて感じだ  
ーー。はい、止血」  
「ひ、えつう」

チェシャ犬は黒乃の細い首を加減なく握りしめる。それによつて傷  
が深まつたのか、少し動脈を傷つけたのだろう、人に似た鮮やかな  
赤い血はだらだらと掘む腕を流れ落ちていく。

「ねね、痛いつてどんなの? 今どんな感じ? 怪我しても痛みつて感  
じないんだよねえ僕は」

「ふ、うええ、無邪気な言葉攻めなんて、初めてだよう……でも  
もつと…」

「う、……………つ」

「わあ、伯爵すつ”い鳥肌つ! 本当に遅刻魔くんが苦手なんだね  
えー。あはははははー!」

伯爵は冷や汗を浮かべ、ケタケタ囁いこひげるチェシャ犬を惡々し  
そうに一瞥する。

S伯爵、イニシャルとは関係ないのだが、彼は根っからのサディストだ。苦痛や恐怖に歪む顔を見ることに喜びを見出す変態だ。  
だからこそというか……。いたぶつてもむしろ喜ばれてしまうよう

な、黒乃といつ生き物が理解できないらしい。

伯爵は凍えるまなざしさのままに、一つ搔かれてしてゆくべつと立ち上がる。

「……、ヴォノムに、ペシトの嬢はちゃんとしりと伝えておけ」

伯爵は私に地を這うような声で吐き捨て、じわり、じわりと、その黒尽くめの姿を歪ませていく。

線が点の集まりであるように、輪郭がバラバラになってナーフに戾るうとしているのだ。

勝つた。

「ええ、伝えておくわ。『機嫌よつ伯爵』

「……ふん」

ついに点はその連結を放棄し、一つ一つ線を崩して蒼き円へと舞つていく。

バラバラ、ひらひらと。それらは幻想的な燐光をはなつ、瑠璃色のスワローテイル揚羽蝶の大群だった。

後には主に見捨てられた水煙草だけがぽつりと残されている。

キノコはやがてざわめくことを止め、森は穏やかに静寂を取り戻していく。

「消え……たのか？ なんでだ？」

戸惑う青年に肩をすくめて返す。伯爵と対峙していたために、背に汗がびっしょりなのは氣づかれたくはない。

「伯爵はこの黒乃が大の苦手なんですよ。…………まあ、相性がとことん悪いといいますか」

「はあ、激しかった。伯爵、僕は嫌いじゃないんだけどなあ。異物を見るみたいな眼を向けられるとゾクゾクするんだよ～」

「この子が強いつてわけじゃ…………なさそうだな。何となく分かった。怪我はほつといてもいいのか…………？」

「ああ、案内人の生命力は人間とは比べ物になりませんよ」

「この子が案内人なのか！？」

バサリ、と大きな羽ばたきに我に帰る。伯爵は去り均衡状態は破られた。

「黒乃、出口へ！」

黒乃をとつさに突き飛ばす。突っ込んできたジャバウォックの鋭い爪は空を切った。

私の背丈の2倍はあるうかといつ巨体は、通り過ぎるだけで爆風を巻き起こす。

ヘタにぶつた斬る訳にはいかない。もちろん芋虫の時はわけが違う奴は斬った端から分裂し増殖する、ひたすら厄介な性質を持つのだ。

ナイフを逆手に握りしめてジャバウォックと相対する。

さあ、頭を切り替える。

私はずっと…………この時を待ち望んでいたのだから。

「…………覺悟なさい。今度こそ一一片も残さずに殲滅してあげるわデカ物！」

「…………！？」

黒乃がギョッと振り返る。青年の腕を取りさつと離脱しようと試みたようだが、一体何をもたもたしているのか。

「……ちよつと！」

私は黒乃に追いすがるうとしたジャバウォックの尾に斬り付けて、注意をこぢらに惹きつける。

おそらくこの怪物の表皮は、ダイヤの硬度10を上回る。謎の物質から作られた伯爵製のナイフだからこそ、かろうじて傷を負わせられているのだ。

「黒乃！ 何やつてるの、早く行きなさいっての！..」

「つていうか、アリス、まさか怪我した理由つて…………」

青年も気づいたのか、私の頬の怪我を凝視する。

「…………ああああ！ 僕を餌にしたんだねアリス――！？」

正解。

黒乃に手伝いを頼まれるよりも前、たまたま遭遇してしまったジャバウォック。

…………私は思い切り苦戦した。

ジャバウォックとの戦闘が初めてだつたから

そんな言い訳

はしたくない。なんと言おうとあれば私の徹底的な敗北だ。

あげく何体かに分裂させてしまい、父の手を煩わせてしました。し

かも父は私を庇つて怪我まで負つた。

どれほど、どれほど深く、身を切るような自責に苛まれたことか。

今、相対する」のジャバウォックは逃がしてしまった最後の一匹。

「あんたのおかげで、早く見つけられたわ！」

「つて、そもそもこれアリスのせいなんじゃんか——！？」

「そうとも言うわね！」

「ひどい！？」

「あ、アリス……」

だから多少は悪いなーと思つて、律儀に青年を守り通したんではな  
いか。

私は話しながらも、無茶苦茶な軌道で襲い掛かつてくねり首をギ  
リギリの動作で受け流す。

早く出口へ行つてくれないものか。 実を言つとあまり喋つて  
いる余裕はない。

「でも、私が仕留め損なつたのと、あんたが襲われたのは別問題で、  
しょっ」

「…………うつ」

「アンタが、遅刻しやがつたのもつ、別問題よね？」

「…………うつ！」

「分かつたらわつとと行きなさい」

黒乃を絶対に逃がすまいと、ほぼ同時に襲いかかつてくる3本の首。

それぞれに目掛けてトランプを投擲、狙い違わず瞳に命中。爆音とともに3本の首がのけぞる。そしてガラスを引っかく音に似た、背筋のあわ立つ咆哮が響いた。

「今！」

「あー、うーー、……頼んだからね、アリスト！」

黒乃が今度こそ戦域を離れようと青年の手を取るのを確認して、これで戦闘に集中できると安心する。

ジャバウオックは爆発で視力を、硝煙の匂いで嗅覚を一時的に失くしている。だがそう長くは持つまい。やるなら今。血でべとつくなイフをより大きな新しいものに持ち替え、構えなおす。その時。

「これでアリスはリベンジに成功。青年は転生を果たして、みじ」と幸せになりました。めでたし、めでたし？」

不吉な予感が声となつて降つてきた。  
構えを解かぬままに見上げた先では、チエシャ犬が二タリと笑んでいるではないか。

「でもそれじゃあとあ。面白くなんて、ないよねえ？」

よつ、と軽い掛け声とともに、チエシャ犬の身体から解けた包帯が、急速に怪物へ触手を伸ばす。

白と黒の2色はジャバウオックの胸に絡みつき、絞るよつて締め上げて、締め上げて、締め上げる。

こいつが私達を助けよつとする訳がない。

なら、この行動は

「…………まさかつ」

グ ジュリ。

形容しがたい異音を発して、それは真つ一いつにねじ切られた。

ジャバウォックは、分裂するのだ。

\*

「ねえ、あのねエンジュちゃん。今、S伯爵カウント・エスがいらして、新しい水煙草を取りに来たんだけどね」

いかにも気乗りのしない風の声が聴こえて、盲田の五月ウサギ

円珠はコーヒーを飲む手を止めて振り返る。

寂れた教会の入り口、そこに佇む帽子屋のもの言いたげな気配に悟つたのか、彼は一つ頷いて傍らの刀を取り立ち上がる。まるで目が

見えていたかのよつた自然な動きだった。

先ほどまで彼の膝に座っていたヤマネ少年が、心配やうひの手をとる。

「むー」

「…………せひせひ、行くの？」

「やねり黒乃が心配だ」

「うーーん、本当は賛成したくないんだけどねえ。ヒンジュぢやん、怪我させたくないもの」

何を言つてこるんだと、田珠はゆるつと首を振る。

「…………そんねママはしなこ」

「知つてるけど。万ーのことを言つてゐるのよ」

はあ、とまるで心配性の母親みたいな手つきで、頬に手をあてて溜息をつゝ帽子屋。感情を表すよつて、彼の羽根耳がしゅんと下がつた。

「マニー、強守を頼むな

「むー、むー」

まかせとけ、と胸を張つて了承するマニー。田珠は少年の健気な様子にわざかに微笑んで、その頭を撫でる。

「いい子だ」

「…………ヒンジュぢやん」

非難の目を向けるキサトにも、田珠は頑なに主張を曲げない。

「それにキサト、ジャバウォックを滅するのは」

「案内人としての義務、でしょ」

「そうだ。……元案内人といえどそれは変わらない」

「……はあ。ホントに呆れるぐらい真面目よねえ、エンジニアやんつで」

「そつ……なのか?」

「そうですね」

「しょうがない、とキサトは茶会の片づけを始める。

片付けといつても、シルクハットを脱いでそこに何もかもを放り入れるという何とも荒っぽいやり方だ。

湯気を立てていたティーカップも、出来立てのフィッギングパイも、無造作にぽんぽん放り込んでゆく。

その中がどうなっているのか不思議である。

最後に残った純白のテーブルクロスを押し込んだりこれにて準備完了。

「……や、そこまで言つたら付き合いましょ」

ちやつと、キサトは帽子を被りなおして、角度を調整しながら微笑む。円珠は、なぜそんなに着いてきたがるのか、とばかりに首を傾げている。

「……別に（着いて来なくても）構わないんだが」「そんなつれない事言つと、キサト泣いちゃうわよー

「うむと円珠は頷く。

「……いい大人が泣きわめくところなど見たくはないな。見えないが」

「……ホントに泣いちゃつていいかしら？」

「むむー、むーー（いつてらつしゃーい）」

適当な軽口を叩きあいながら、彼らは朽ちた教会を後にした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1274d/>

---

A L I C E in the DARK

2010年10月10日18時53分発行